



もとながさだまさ  
元永定正 《作品》

もとながさだまさ(1922- )  
上野市で生まれた。30歳のときに神戸に移って具体美術協会というグループに加わり、いろんなひとに衝撃を与えるさくひんを作った。「具体」というのは、ひとの考えや感覚など、内側にあるもろもろを物質によって具体的にあらわすという意味で、このグループは、いままで誰もやったこともない新しい美術を追求した。この作品は兵庫県の六甲山の夜景にヒントを得て描いたらしい。

そろそろ抽象画に慣れてきたころやな。まだまだ飛ばしまつせ！  
これこれ、このさくひん。元永はん。三重県立美術館の学芸員はみんなこの作品が好きや。もちろん森本教頭先生も好きやろな。校長先生はこんなんが好きかどうかは知らん。こっちの作品よりも( )のほうが好きやろな。カツコを埋めなさい。

あかん。どんどん本質から離れてしもた。それでや、学芸員のひと、何でこの作品好きなんか、聞いてきたわ。そしたらな、「色がきれい」「かたちがかわいい」「ちよぼちよぼがすてき」やて。低レベルな感想。日本の将来が思いやられるわ。僕らがなんとかせなあかん。もっと、こう「計算しつくされて生じた形態を重層的に絡ませながらユーモアだけでは処理できない深遠な世界へと我々を誘い……」

あかん、ちがうわ。やっぱりかわいいわ。このさくひん。

さいとうよししげ(1904-2001)

東京で生まれた。16歳のとき、ロシア人画家による展覧会を見て、今まで見たこともない新しい表現に衝撃を受けた。その後も常識を打ち破る新しい芸術に出会い、自分も挑戦した。制作に行き詰まり、文章を書くことに集中した時期もあった。戦前から一貫した前衛的な作品は当時の作家に多大な影響を与えた。



よししげ  
斉藤義重 《作品》

絵を描くんは、何も筆だけやないでえ！使っておもしろそう  
なもんやったらどんなもんでも使うでえ！親でも使うでえ！  
て、いうわけで斉藤はんは、電動ドリルなんかを使ってはりま  
んねん。こうなったら芸術家とドリルのバトルですなつ。暴れ  
馬みたいに言うこときかんところを、何とかねじ伏せて、それ  
でも言うこときかんと暴れよる。こまったもんや。  
でも、ぐうぜんできた線をちゃっかり利用してさくひんにして  
まうところなんか、ちよつと隅には置けやんな。